



甚大な被害が出た里塚地区

地震による家屋損壊 清田区が突出、全市の4割！

かつての川や沢を
埋め立てた付近で発生

罹災証明の交付数による家屋の損壊件数

(札幌市、2019年1月21日現在)

	全壊	大規模半壊	半壊	一部倒壊	倒壊なし	計
中央区				73	12	85
北 区	1	3	38	435	7	484
東 区	5	2	118	919	13	1057
白石区	4	5	156	552		717
厚別区			12	184	2	198
豊平区	7	5	18	285	12	327
清田区	84	115	231	1711	49	2190
南 区		1	6	143	6	156
西 区				87	1	88
手稲区	1		2	207	1	211
全市	102	131	581	4596	103	5513

昨年9月6日未明の北海道胆振東部地震で、清田区では各地で液状化が発生し、家が傾いて損壊するなど大きな被害が発生しました。特に被害が大きかった里塚1条1丁目地区では、昨年12月から損壊家屋の解体撤去が始まり、雪解けの4月には地盤強化など本格的な復旧工事が始まります。復旧工事が終わるのは2年後だそうです。

罹災証明の交付数でみる清田区の家屋の損壊状況は2190件(2019年1月21日現在)で、これは札幌全市の4割に当たります。清田区が突出して地震被害が大きかったことがわかります。

なぜ、清田区だけ被害が大きかったのでしょうか。はっきりした原因はわかりませんが、液状化被害が発生した場所には一つの共通点がありました。いずれも、かつては川や沢で、それを盛り土して埋め立てた住宅地を造成した場所およびその周辺という点です。

里塚1条1丁目地区は、かつて三里川が流れていました。昭和53年、

54年に札幌市が開発許可を出し、民間業者が盛り土して宅地造成し、売り出した土地です。かつての川は暗渠(地下水路)になり、ここに川が流れていたことは地震前まではほとんどの人が知りませんでした。

液状化による地盤沈下と家屋の傾きは、美しが丘3条6丁目や美しが丘5条9丁目、清田中央地区の清田7条2丁目、3丁目などでも発生しました。安定した地盤と思われている平岡でも液状化が発生しました。いずれも宅地開発前は川があった所で、今は暗渠河川や下水道になっています。そして、居住するほとんどの人がかつて川や沢だったことは知りませんでした。

清田区の被害は、かつての地形を抜きには読み解くことができません。その際、参考になるのが札幌市作成の「札幌市河川網図」と、国土地理院が地震後に作成した「札幌市清田区地形復元図」です。

「札幌市河川網図」(図①)で里塚地区を見ると、昔の三里川がどこを流れていたのかが大体わかりま

す。「河川網図」で、地表に出ている三里川は赤い線で描かれています。かつての三里川で今は暗渠になっている部分は、丸印の付いた緑色の線で描かれています。

里塚1条1丁目で起きた甚大な被害は、「河川網図」にある「三里川」暗渠の上で起きました。美しが丘地区の被害は「河川網図」にある「三里東排水」暗渠の線状で起きました。「三里東排水」は里塚霊園まで伸びています。いずれも、かつては川や沢だった所が今は盛り土で平坦な住宅地になっています。

国土地理院の「清田区地形復元図」は、宅地造成される前の昭和41年(1966年)に撮影した空中写真を判読し、今の地図に落としたものです。

里塚地区の「清田区地形復元図」(図②)を見てみましょう。青い部分はかつての谷です。ここに三里川が流れていました。一番左の青い部分、ここが里塚1条1丁目地区です。今は「三里川」暗渠になっています。

この谷は赤線の国道36号線を超えて上流方向に伸びています。この上流方向にある美しが丘小学校グラウンドで大きな地割れができ、付近で液状化が発生しました。

左から3番目の青い部分が現在、「三里東排水」暗渠になっている部分です。国道36号線を超えて里塚霊園まで谷は伸びており、それに沿って液状化、家の傾きが発生しました。

一番右の青い部分の谷は、「河川網図」によると、現在は「里塚西排水」暗渠になっています。左から2番目の青い部分の谷は、宅地造成の際に暗渠河川にしないで埋め立ててしまったようです。

「清田区地形復元図」で分かる通り、里塚1条1丁目地区は幾筋もの三里川が一つに集まる付近でした。札幌市は、この地形を「集水地形」と呼び、地下水が多く集まっていた可能性を指摘しています。地下水が集まるということは、宅地開発時に造った暗渠排水システムが果たして正常に機能していたのか、疑念の声が区民から上がっています。そして里塚以外の液状化被害の地区でも、同様の不安が募ります。

清田区内の町内会連合会の会長5人が昨年11月19日、秋元市長に「清田区民が安心して住める地盤にしてほしい」と異例とも思える要望を行いました。清田区内では美しが丘や清田など、今回を入れて2回も3回も液状化が起きた地区もあります。異常事態です。里塚地区の復旧復興はもちろん大事ですが、清田区は各地区で液状化被害が発生しました。里塚以外のエリアの地盤についても区民が安心して暮らせるようにしてほしいものです。



▲図① 札幌市作成「札幌市河川網図」



▲図② 国土地理院作成「清田区地形復元図」



札幌市の地下鉄建設計画で唯一の積み残し



地下鉄の清田方面延伸を早期実現しよう!



地下鉄東豊線

札幌市が地下鉄の清田方面延伸を重要課題と位置づけ、検討を継続する方針であることが、昨年11月22日の北海道新聞(札幌市内版)の報道で明らかになりました。市はここ10年ほど「採算が取れないので清田延伸は困難」という姿勢でした。それだけに、清田区と豊平区の町内会連合会などで構成している地下鉄東豊線建設促進期成会連合会(牧野晃会長)から「大きな前進、大きな一歩だ」と期待の声が上がっています。

札幌10区の中で地下鉄もJRもないのは清田区だけです。このため清田区だけバスターミナルもできず、バ

ス路線が使えづらかったり、市が進める「地域交流拠点」づくりも清田だけは形成されないなど大きな支障が生じています。

地下鉄を清田方面まで伸ばすことは、かつて札幌市が自ら長期計画に載せ、私たち清田区民に約束していたことです。今年1月8日に行われた清田区新年交歓会で、主催者挨拶に立った伊藤昭夫北野地区町連会長は「検討継続でなく一刻も早い決定、着工を区民は熱望している」と、来賓で来ていた秋元克広市長の前で述べました。40年来の地域住民の悲願である延伸計画の経緯をまとめました。



地下鉄東豊線建設期成会は毎年、札幌市長に延伸を要望

地下鉄の清田方面延伸の経緯

地下鉄を清田方面まで伸ばす計画を札幌市が打ち出したのは40年前の昭和54年(1979年)です。札幌市総合交通対策調査審議会(総交審)で検討し「地下鉄50キロ構想」を発表しました。南北線(麻生一真駒内)、東西線(新さっぽろ一宮の沢)、東豊線(栄町一北野)の3線総延長50キロを1995年までに建設するという構想でした。当時は「北野」までという構想でした。

昭和60年(1985年)には、福住から北野通に出て北野(清田通との

交差点)まで行くルートと駅(共進会場、月寒東、北野)も発表されました。

昭和63年(1988年)には、札幌市長期計画にも「東豊線(北野方面)の延長を推進する」と明記されたのです。当時、市は市議会でも「清田方面延長」を公言していました。

その後、1997年に清田区が誕生し区役所が国道36号線近くに開設されたことと、札幌ドームが建設されることになったことから、延伸ルートを北野通から国道36号線に

変更し、終点を清田区役所付近とする機運が高まりました。

誕生したばかりの清田区は平成11年(1999年)、まちづくりの指針ともいべき「清田区まちづくりビジョン2020」(目標年次2020年)を策定しました。この中で「地下鉄東豊線は地域中心核(清田区役所付近)まで延長する必要がある」と明記したのです。

そして札幌市は2001年、再び総交審を開き「地下鉄50キロ構想」で唯一積み残しになっていた清田方面延伸を検討し、「地下鉄の延伸に向けた検討を進めていくことが必要」との結論を出したのです。延長

区間は国道36号線沿いに4・2キロ。駅は札幌ドーム、東月寒、北野、清田の4駅としました。

清田区の地域住民は、これに大いに期待しましたが、その後、市は総交審の結論を覆し、「清田延伸は困難」と180度方針を転換してしまいました。

ところが、冒頭に記した通り市は昨年11月、清田延伸を検討する方針を示しました。これまで採算性というモノサシ本で「困難」としてきた市ですが、新たに「清田区」の地域中心核形成のために、という視点を盛り込む姿勢を見せている点が注目されます。

公営交通は採算性のモノサシだけでいいのか

札幌市はここ十年余、地下鉄清田延伸は「30年で総収入が総経費を上回るという国の基準を達成できない」という理由で「清田延伸は困難」と区民や地下鉄期成会に言ってきました。ところが、この「国の30年基準」というものは、国土交通省に問い合わせたところ、明文化した規定ではないことがわかりました。一定の目安ではあるようですが、唯一絶対の条件などではありません。

確かに、福住―清田間の採算性は厳しいでしょう。では現在の東西線、東豊線は30年間で累積黒字になるのでしょうか。到底なりません。大赤字です。これは札幌市交通局も認めていることです。「それでも地下鉄は必要だ」という政治判断があって建設、開業したのではないですか。

採算性は確かに重要です。しかし、公営交通は採算性というモノサシ本だけで決めていいものでしょうか。地域の暮らしやまちづくり、都市設計、税負担の公平性、住民の福祉、札幌市がかつて正式に清田延伸計画を決めていた経緯など様々な観点から論じられるべきではないでしょうか。

清田区と豊平区の町内会連合会などでつづけている地下鉄東豊線建設促進期成会では、このようなとらえ方をして、毎年、市長に「地下鉄を清田区へ」の要望を続けています。昨年からは清田区内の全町内会も構成員に加わり、運動のすそ野を広げています。清田区と豊平区の市議、道議も顧問に加わっています。清田区、頑張っていきましょう。



羊ヶ丘通地区 スノーキャンドルフエスティバル 2019

まるでおとぎの国

羊ヶ丘通地区スノーキャンドルフエスティバルが1月26日(土)、清田区美しが丘3条6丁目の公園や広場、歩道で行われました。たくさん

のスノーキャンドルとアイスキャンドルが灯り、多くの人が幻想的な世界を堪能しました。

羊ヶ丘通町内会とパシフィック美しが丘壱番街などが主催した冬の名物行事で、今年で11回目となりました。

アイスキャンドルは雪の上に並べるだけでなく、空中につるしたタイプもあり、今年も様々な工夫が凝らされていました。

今年は、風も降雪もない絶好のコンディションでの開催となりました。雪と氷と灯りの芸術空間は、まるでおとぎの国に迷い込んだ感じで、大人も子供も「わあ、きれい」「すごいね」と歓声を上げました。

この美しが丘地区のスノーキャンドルフエスティバルは、地域住民が開催する「まちの灯り」としては、札幌でも有数の華やかさで、今年も見ごたえ十分でした。

スノーキャンドルもアイスキャンドルも雪のオブジェも、地域住民みん



一夜限りの雪と灯りの幻想的な世界

なで作り上げたものです。会場では、あったかいお汁粉やコーンスープ、ココアなどの無料サービスがあり、地域の人たちが体を温めながら雪の上で交流しました。

このほか、清田区内では今年も1

月に真栄中・真栄小、清田小、平岡樹芸センター、西友清田店前、清田南小などでも「まちの灯り」が行われました。清田区の冬を彩るイベントになっています。

♪みんなで懐かしい歌を

歌声サロンを毎月開催

地域サロン・ぽっけ

地域サロン「ぽっけ」(清田1条2丁目2-2)は、毎月第3土曜日(10時～11時30分)に「歌声サロン」を開催しています。毎回、20人ほどが集まり、懐かしい唱歌や昭和歌謡を歌って、大いに盛り上がっています。

地域サロン「ぽっけ」は、旧清田郵便局の建物を改装して、NPO法人ワークス・ぽっけが運営しています。

毎回、楽しいトークを交えて歌声サロンをリードしているのは、歌声ボランティア「ふれあいサポート」代表の園部真人さん(平岡公園東3丁目)と仲間の皆さんです。

大きなスクリーンにパソコンで歌詞を映し出し、

「高校三年生」や「青い山脈」など懐かしい歌を声を出してみんなで歌います。歌にまつわるエピソードを園部さんが楽しく紹介してくれます。

歌声サロンはどなたでも参加できます。費用はコーヒー代として300円。問い合わせはTEL011-883-6300へ。



元気になります、歌声サロン

今年もアオサギがやって来る!

平岡イオンの森

春告げ鳥アオサギが毎年3月になると、平岡の通称「平岡イオンの森」に南方よりたくさん飛来します。

アオサギは体長90cm～98cmの大きな鳥です。平岡公園などで自然に親しむ活動を行っている「平岡どんぐりの森」によると、毎年3月から6月にかけて、集団営巣地になっている平岡イオンの森でひな鳥を育て、その後、えさの豊富な川や水のある道内の他地域に移って行き、8月から9月にかけて本州方面に渡ります。そして翌年3月にまた平岡に戻ってきます。

イオンの森は、カラマツやシラカバなどの木が生い茂っています。立ち入り禁止のため自然がそのまま残されており、アオサギはこのカラマツ

の木に巣を作り、子育てを行います。平岡どんぐりの森によると、巣はおよそ100個くらいあるそうです。

アオサギの営巣地は篠路や江別にもありますが、平岡が最大だそうです。季節になると、アオサギが優雅に飛ぶ姿が見られます。



優雅に飛ぶアオサギ＝平岡イオンの森

昭和30年代情景画家

清田の野島理さん

懐かしい昭和30年代の札幌や小樽、夕張などの風景をモチーフにした独自の絵を描く画家が清田区にいます。野島理さん(清田9条3丁目9-10)です。東京や札幌で個展を開いてきましたが、昨夏、初めて地元清田区の里塚・美しが丘地区センター(里塚2条5丁目)で個展を開きました。

野島さんの絵は、アクリル絵の具で描いた昭和30年代の心象風景をモチーフにしています。写真ではなくイメージを膨らませた風景画です。にぎやかだった商店街、チャンバラごっこをする子供たち、懐かしい家並みなどをノスタルジックに描いた作品ばかりです。懐かしい昭和30年代の街のざわめきが聞こえてきそうです。

なぜ昭和30年代の風景なのでしょう。か。「今より暮らしは大変だったけど、心は豊かだったのが昭和30年代。最も昭和的な時代で、あの時代が僕は好きです」と野島さんは言います。

野島さんは昭和34年、札幌市中央区南8条西8丁目の生まれ。子供の頃から絵を描くのが好きで、専門学校を卒業して札幌のデザイン事務所に就職。昭和の風景や建物を描きだしたのは2002年からと言います。

東京の現代版画会に所属し、東京・上野で開催する同会の展覧会に出品する活動を行っていましたが、数年前から札幌中心に個展を開催しています。そして昨年、はじめて地元清田区で個展を開催しました。

現在は自宅兼アトリエで作品作りに励む毎日です。野島さんの名刺には「昭和30年代情景画家」と書かれています。今年は秋口に札幌で個展を開くそうです。



昭和30年代を描く野島理さん



懐かしさを感じる野島さんの作品



地域に笑いを！ 応援する会も発足！

清田区在住の落語家 桂三段さん

上方落語協会会員の落語家、桂三段さんは清田区北野に居を構え、札幌市内をはじめ全道各地で落語会を開き、明るい笑いを地域に広めています。清田区では、応援する会も誕生しました。

桂三段さんは、桂文枝(桂三枝)師匠の弟子で、「よしもとクリエイティブ・エージェンシー」の所属。帯広市出身で、札幌で歯科技工士になりましたが、芸人を志して23歳の時に上京。パチンコ店やファミレス店員、大工などのアルバイトをしながら、寄席に通い落語やお笑いの勉強をしたそうです。

特に夢中になったのが、桂三枝さんの軽妙な笑いの落語。三枝さんが札幌の落語会にやって来た際、三段さんは大胆にも「弟子にしてください」と直接、三枝さんに申し込んだそうです。半年後、入門が許されました。2005年のことでした。

大阪で、三枝さんが司会をするテレビ番組「新婚さんいらっしゃい」の前説(番組本番前の盛り上げ役)を4年間務め、さらに2011年から2015年4月まで、島根を拠点に活動。そして札幌へ。現在、札幌市内で落語会を開催するほか、北海道179市町村巡りを展開中です。

こうした桂三段さんを応援しようと、地元の清田区で「桂三段さんを応援する会の清田の会」が発足しました。応援する会の連絡先は落合(TEL 090-4875-4230)、川島(TEL 090-3116-6138)です。応援する会は、

清田区で落語会や三段さんとの交流会などを計画しています。

桂三段さんは、地域に出向いて落語会をやってくれます。お問い合わせは、オフィス三段(TEL 090-4003-1326)。



爆笑の洞桂三段さんの落語会＝里塚・美しが丘地区センター



自宅前で雪像づくり20年！

平岡公園東6丁目の熊谷さん

札幌市清田区の住宅街に、今年も大きな雪像が登場し、近所の人や子供たちの話題になりました。

雪像を作ったのは、平岡公園東6丁目5-16の熊谷宏之さん、満寿江さん夫妻。今冬も12月に雪のクリスマスツリー、お正月にはバイキンマンの雪像を自宅の前庭につくりました。そして2月には、「春よ来い」の思いを込めて、満開の桜の木の雪像を作りました。

夜は雪像をライトアップする凝りようでした。

このように、自宅前に大きな雪像

をつくって、今年で20年になります。初めは子供たちのためにと思って作り始めた雪像ですが、いつの間にか孫のために、となったようです。

かつては、さっぽろ雪まつりで大雪像を制作する自衛隊員に雪像づくりのコツを教わったこともあったそうです。

近所の人や子供たちも、毎年、熊谷さんの雪像を楽しみにしています。熊谷さんは「近所の方から、また雪像をつくるのですね、と言われると、責任を感じてしまいます」と話していました。



今年のお正月に制作したバイキンマンの雪像



熊谷宏之さん

あの店この店

真栄の地酒専門店

全国の地酒と梅酒の人気専門店「地酒ノ酒屋 愉酒屋(ゆしゅや)」が清田区真栄にあります。真駒内御料札幌線沿いの真栄地区会館隣のコンビニから住宅街に入っていくと、「愉酒屋」の大きな看板が目に入ります。

全国の蔵元から直送した地酒と地梅酒を専門に販売しています。

店主の成田昌浩さんは3代目。もともとは「まちの酒屋さん」でしたが、成田さんが受け継いだ時は、お酒のディスカウントショップやスーパー・コンビニでの酒類販売の拡大などで「まちの酒屋さん」は受難の時代でした。

この時、栃木県の銘酒「姿」(飯沼銘醸株式会社)に出会い、「日本酒って、こんなにうまいのか」と衝撃を受け、日本酒1本で勝負することにしました。

愉酒屋

す。北海道の地酒も取り揃えています。

<お店情報>

■住所/清田区真栄2条2丁目4-12

■電話/011-881-2344

■FAX/011-881-2342

■営業時間/10時～19時(平日)、10時～18時(土・日・祝)

■定休/水曜日



ひろまある清田から読者の皆様へ

「ひろまある清田」新聞版を読んでもいただき、ありがとうございます。

「ひろまある清田」は、清田区の住民グループ「地域メディア ひろまある」(連絡先: 清田区北野2条3丁目11-16)が運営するホームページ(ウェブサイト)です。日々、清田区内の地域情報をインターネットで発信していますが、今回、初めて新聞版を発行しました。ホームページも新聞版も「清田区の元気を応援します」をモットーに編集しています。

「ひろまある清田」は、元新聞記者、元NTT職員、大学教授、ボランティア団体・スポーツ団体主宰者、NPO法人職員、福祉施設職員、元町内会長らで構成。全員が清田区民です。

ホームページは、パソコンでもスマホでもご覧になれます。「ひろまある」で検索してみてください。スマホの方は、右のバーコードからもご覧になれます。

「ひろまある清田」は昨年10月6

日、北海道新聞(全道版)に「地域密着サイト活躍/地震被害発信/読者の支持広がる」と紹介されました。

また、大阪のMBSラジオから出演依頼があり、9月16日に編集長が電話出演して清田区の地震被害の様子をお話しさせていただきました。「広報さっぽろ」(2018年3月号)でも「清田区の魅力を発信」と紹介されました。今後ともよろしく願います。(代表・編集長 川島亨)



札幌市
さばーとほっと基金
助成事業

